

2023年度

近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会

2024年1月6日・7日

近畿ESDコンソーシアム・奈良教育大学ESD・SDGsセンター

令和4年

ESD・SDGsセンター
多目的ホール



建物情報 奈良教育大学・附属小学校・附属幼稚園

- LI** 張政1号棟
Zhang Zheng 1 Building

- ① 管理栄養・保健センター
Administrative Staffing / Health Care Center
- ② 図書部
Library
- ③ 造形美術研究センター
Center for Art and Design
- ④ ESD・SDXモニター
Center for ESD and SDGs
- ⑤ 情報センター
Center for Information and Processing
- ⑥ 教育史料館
Center for Historical Materials of Education
- ⑦ 図書
Auditorium
- ⑧ 会議室
A/B Conference or Meeting
- ⑨ 体育館
Gymnasium

- 10 学生会館 山口ビル
Student Hall / Yamanaka Hall
- 11 学生会館
Collegiate
- 12 経済文化総合研究センター
Center for General Needs Education
- 13 運動科学総合センター
Center for Educational Research of Science & Sports
- 14 国際交流総合センター
Center for International Exchange & Studies
- 15 音楽館
Nishimura Hall
- 16 城山館
Gosha Hall
- 17 理化学部 入門施設
Common Facility for Laboratories for Sciences
- 18 談話・活動室
[1階] 学生自治会館内
談話室
Lounge & Activity Room
- 19

設備情報

- エレベーター 多目的トイレ
バス等停留 駐車場
食堂・売店 AED
案内所 相談員図像



ごあいさつ



2023年度の「近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会」を開催できますこと、心より嬉しく思います。ここに集う児童・生徒の皆さん、保護者の方々、先生方、そして会を支えてくださる方々、すべての皆様のご尽力に対し、主催者を代表して厚く御礼申し上げます。

例年はクリスマスの前後に行われていたこの会。単身赴任の私にとっては唯一のクリスマスパーティーとして楽しみにしていたのですが、やはり皆様にとっては、ご家族や友人とともに年末をお過ごしになる方がよかろうということで、年始に移すことといたしました。私の郷里では、三が日を「大正月」、15日を「小正月」と呼んで二度新年を祝っておりましたが、今年は「中正月」ができたようで、これもまた嬉しいことです。また、授業研究を専門とする私なのですが、学長という職務に就いてからは教育現場で子どもたちと接する機会がほとんどなくなっているのです。いつも感動を得られる子どもフォーラムは特に楽しみです。

さて、私ども奈良教育大学は、2022年に「ESD・SDGsセンター」を新設し、ESDの推進を加速してきたところです。そして、2024年はいよいよ世界を視野に、国際シンポジウムを実施することになりました（2月17日～18日）。日本はESDの提唱国ですから、日本のESDを発信するとともに、他国の優れた実践や研究知見を得て交流し、皆様とともに世界のESDを牽引していきたいと思えます。言うまでもなく、世界の平和が持続できていない状況になっている中、あらためてSDGsのウエディングケーキモデルの頂点に掲げられている目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」の実現を急がなければなりません。そのためには、特に次代を担う子どもたちと先生方がESDに取り組み、全世界の人々とパートナーシップを組んで地球を持続可能にしていく意欲と実行力を発揮していく必要があります。教育と学習がその根幹であることは、右のロゴが表しています。



近畿ESDコンソーシアムの活動は世界に誇れるものだと思います。今日の発表や実践交流の輪が近畿のみならず全国に、そして世界へと広がっていくことを願ってやみません。そして、本当に、誰一人取り残すことのない社会の実現に向け、皆で力を合わせ、ESDを着実に進めていきましょう。

2024年1月6日

奈良教育大学 学長
近畿ESDコンソーシアム 会長
宮下 俊也

2023年度 近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会開催要項

1. 目的

学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の幼稚園、小中学校、高等学校でESDの理念に基づく教育活動が展開されつつある。また、持続可能な開発目標（SDGs）への関心が企業やNPOなどの生涯教育において高まってきており、学校教育・生涯教育および企業等においても、質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、またESDの普及を目的に開催する。

2. 主催 近畿ESDコンソーシアム、奈良教育大学ESD・SDGsセンター

3. 後援 ESD活動支援センター、近畿地方ESD活動支援センター、ASPUniv.Net

4. 開催日時 2024年1月6日（土）9時50分～17時10分
1月7日（日）9時30分～12時

5. 会場 奈良教育大学本部大会議室、ESD・SDGsセンター多目的ホール、講義棟

6. 日程

【1月6日（土）】

9:30～9:50 受付（奈良教育大学本部）

9:50～10:00 開会行事：大会議室

司会：阪本さゆり氏（ESD・SDGsセンター研究部員）

挨拶：宮下俊也（近畿ESDコンソーシアム会長・奈良教育大学学長）

10:00～12:20 ESD子どもフォーラム（発表20分＋講評・移動10分）

進行：奈良教育大学ユネスコクラブ 吉岡優来、富永望天、田中天央衣

① 大津市立仰木の里小学校

② 福岡市立玄界小学校

③ 橋本市立城山小学校

④ 奈良女子高等学校

講評：宮下俊也（近畿ESDコンソーシアム会長）

柴尾智子氏（近畿ESDコンソーシアム外部評価委員）

12:20～13:30 昼食休憩

13:30～15:30 ESD実践交流会Ⅰ（発表20分＋質疑10分）

第1分科会：大会議室

司会：橋本市教育委員会主幹・主任指導主事 木下豪人氏

① 和歌山：白浜町立白浜中学校 西田拓大氏

② 鹿児島：屋久島町立神山小学校 濱崎昇平氏

③ 熊本：菊池市立菊之池小学校 一安尊正氏

④ 奈良：奈良市立伏見小学校 川邊甲余子氏

第2分科会：ESD・SDGs センター多目的ホール

司会：前大牟田市教育局長 安田昌則氏（ESD・SDGs センター研究部員）

- ① 沖縄：那覇市立松島中学校 高良直人氏
- ② NPO：NPO 法人わかやま環境ネットワーク 臼井達也氏
- ③ 熊本：熊本市立天明中学校 堀尾綾子氏
- ④ 奈良：奈良市立東登美ヶ丘小学校 紺谷隆氏

第3分科会：101教室

司会：橿原市教育委員会指導主事 葛本雅崇氏

- ① 福岡：福岡市立飯原小学校 河野陽一氏
- ② 企業：アドベンチャーワールド 武分渉氏
- ③ 愛媛：松山市立久枝小学校 三浦智子氏
- ④ 奈良：生駒市立生駒小学校 泉谷利恵子氏、安田有輝氏、
新井賢太郎氏、福林倭吹氏

- 15：45－17：00 ESD 講演会：大会議室
「持続可能な未来のために 一人と自然との共生とは一」
NPO 法人 共存の森ネットワーク理事長 澁澤寿一氏
- 17：00－17：10 閉会行事：大会議室
講評：長友恒人氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

【1月7日（日）】

- 9：10－9：30 受付（奈良教育大学本部）
- 9：30－11：30 ESD 実践交流会Ⅱ（発表20分＋質疑10分）

第4分科会：大会議室

司会：奈良市教育委員会指導主事 三木恵介氏

- ① 鹿児島：屋久島町立宮浦小学校 稲留愛氏
- ② 福岡：福岡市立小呂小学校・小呂中学校 枝広隆志氏
- ③ 山形：山辺町立山辺小学校 太田馨氏
- ④ 奈良：生駒市立生駒東小学校 竹田光陽氏

第5分科会：ESD・SDGs センター多目的ホール

司会：奈良教育大学准教授 及川幸彦

- ① 滋賀：比叡山中学校 伊藤由季氏
- ② 和歌山：白浜町立白浜中学校 中村僚太氏
- ③ 鹿児島：屋久島町立八幡小学校 橋口和真氏
- ④ 奈良：奈良教育大学附属幼稚園 白石真季氏

第6分科会：101教室

司会：奈良教育大学准教授 河本大地

- ① 滋賀：長浜市立北中学校 田坂一稀氏
- ② 愛媛：松山市立東中学校 眞柴さなえ氏
- ③ 熊本：菊池市立旭志中学校 米田祐貴氏
- ④ 奈良：奈良教育大学ユネスコクラブ 山平楓、苗代昇妥

- 11：40－12：00 閉会行事
講評：長友恒人氏、柴尾智子氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）
挨拶：加藤久雄（奈良教育大学顧問）

【ESD 子どもフォーラム】 1月6日(土)10:00~12:20
大津市立仰木の里小学校



福岡市立玄界小学校

橋本市立城山小学校



奈良女子高等学校

白浜第二小学校150周年 「学校に温泉を作りたい！」 —地域資源を生かした地域主導の行事・授業づくり—

西田 拓大（和歌山県白浜町立白浜中学校）

I はじめに

和歌山県西牟婁郡白浜町には、海、山、川などの豊かな自然に加え、温泉という天然資源がある。また、白浜町は観光のまちとして古くから形成されており、地域資源にあふれている。しかし、一方で少子高齢化や、有限な資源に対する危機感もある。様々な立場での地域づくりが進む中、教育と地域とのつながりが重要視されるようになってきている。

白浜第二小学校は、今年度創立150年を迎える。この年度を、地域が主体となった教育のあり方を考える機会とし、それを実現する組織づくりをしたいと考えた。私は、この春に同じ校区の中学校に移動になったが、立ち上げに関わったことから、実行委員の一人として携わることができた。「学校は地域のもの」という軸で、ESDの視点で、この取り組みを紹介する。

II 取り組みの概要

(1) 実行委員会形式による取り組み

「地域がやりたいことを地域が支える」

- ・昨年度3月に、多様なステークホルダーによる実行委員会の立ち上げ（図1）。
- ・計6回の実行委員会開催ののち、11月23日に150周年記念行事開催



図1 第1回実行委員会の様子

(2) 学校の取り組み

「学校がやりたいことを地域が支える」

- ・普段からの地域との連携
- ・学校に負担がかからないWin-Winな関係。働きがい改革。

(3) 授業の取り組み

「児童・教師がやりたいことを地域が支える」

- ・「学校に温泉を作りたい！」という児童の願いを150周年記念行事で叶える（図2）。
- ・ESDの視点、価値観をもとにした授業づくり



図2 特設された足湯

III 成果と課題

(1) 成果

地域の方を中心とした、様々なステークホルダーによる対話型組織の持つ可能性を感じることができた。この組織で、児童の夢を実現できたのが一番の成果。ESDの視点を持った授業づくりは、児童の主体的な活動を生み出す。

(2) 課題

- ・持続可能な地域主体の学びシステムの構築。
- ・学校を超えた、白浜でのESDを学ぶプラットフォームの創設。

自ら気づき、考え、実行する児童の育成 ―屋久島型ESDの推進を通して―

濱崎 昇平（鹿児島県屋久島町立神山小学校）

I はじめに

屋久島町では、屋久島型ESDの推進が図られ、持続可能な社会づくりの担い手の育成が町内全体で進められている。屋久島型ESDの基本的な考え方は、『屋久島を持続可能な社会にするために、世界自然遺産を素材にした学習をとおして、直接体験（自然、文化等）と地域の人とのつながりから、「学び、考え、行動する力」と「自尊感情」を高め、「生きる力」を育成する』ことである。

本校においては、その屋久島型ESDの考え方を踏まえて、研究主題を「自ら気づき、考え、実行する児童の育成」とし、2年前からカリキュラムの見直しや教育活動の充実を図っているところである。

「自ら気づき、考え、実行する児童」を育成するための取組について、本校6年生の総合的な学習の時間の取組を中心に述べていきたいと考える。

II 実践の概要

（1） 学校における屋久島型ESDの推進の取組について

学校が目指す児童像の具現化や、総合的な学習の時間における資質能力の明確化、カリキュラムの見直し、保護者や地域の方との情報交換、職員同士の日常的な情報交換等を行いながら、屋久島型ESDの推進を図っているところである。

（2） 6年生の総合的な学習の時間の取組について

6年生は、今年10月から二つのプロジェクトに取り組んでいる。

一つ目は、5年生の時に取り組んだ「伝統野菜かわひこを広めようプロジェクト」との関連から、耕作放棄地に目を向け立ち上げた「荒れ地再生プロジェクト」。

二つ目は、今年の夏の猛暑による外遊びの制限を受けて、外で遊べる日を増やすために立ち上げた「CO2削減プロジェクト」である。

二つの課題を解決するために、地域の人材や関係機関、PTA行事等を活用したり、家庭と連携したりしながら取り組んでいるところである。

III 成果と考察

自ら課題に気づき、解決策を考え、実行する姿が多くの中面で見られた。その要因として、屋久島型ESDの考え方を踏まえたカリキュラムの見直しや地域人材・素材の活用、職員や保護者、地域の方との情報交換等が考えられる。今後も、屋久島型ESDを推進し、「自ら気づき、考え、実行する児童」の育成を図っていきたい。

6年生総合的な学習の時間 「ふるさと菊池よかとたいプロジェクト第2弾」 —菊池の歴史を探究し、その魅力を発信しよう！—

一安 尊正（熊本県菊池市立菊之池小学校）

I はじめに

6年生の児童は、4年生の時に、「ふるさと菊池よかとたいプロジェクト」として、総合的な学習の時間に地域の魅力である、温泉や溪谷、ダムや農業など、地域の魅力発見に取り組んでいる。

本実践は、その第2弾として、熊本県菊池市で約450年にわたり活躍した豪族「菊池一族」を総合的な学習の時間を中心にして教材化したものである。菊池一族とは、蒙古襲来絵詞や日本三大合戦の一つ「筑後川の戦い」にも登場する武士の一族で、2023年の10月には、関連する遺跡（菊池一族初期の支配拠点だった菊池氏遺跡）が国史跡として、答申されるなど大変話題となっている。

また、菊池市役所の部署に「菊池一族プロモーション室」が設けられ、菊池一族関連のお祭りが行われたり、出前授業をしたりと、地域興しの一つにもなっている。今回の学習を通して、児童が改めて菊池の魅力に気づき、郷土を愛する心情を育ませたいと思い、本実践を行っている。

II 取組の実際

- (1) 資料から菊池の現状を知り、単元を貫く課題を設定。
- (2) 「菊池一族」に関して、問いを立て、情報収集に向けて見通しを持つ。
- (3) 自分の立てた問いを解決するための情報を収集する。
- (4) 現地調査をしながら、市役所の方の話を聞く。
- (5) 調査したことをワークシートにまとめる。
- (6) 新聞4面をどの内容にするか、考えを出し合う。
- (7) 新聞の構成を決める、新聞を作成する
- (8) 編集会議を行う。
- (9) 新聞の修正を行う。
- (10) GTのアドバイスを受けながら新聞を完成させる。
- (11) 完成した新聞をどのように発信するか計画を立てる。
- (12) 作成した新聞を発信する。

III 考察と今後の展望

4年時に、地域の魅力発見に熱心に取り組んできた児童であったので、本実践においても、大変意欲的に学習することができている。自分たちが調べたことを、積極的にプレゼンする姿からも、郷土への愛情が高まっていることがわかる。

今後は、調べてきたことをもとに新聞を作成し、それを菊池市外の様々な場所で配布する予定である。このような活動を通して、自分たちのふるさとに対してのさらなる愛情を育み、将来、自信を持って自分の地域のことを語れるようになることを願っている。

子どもたちの「好き」を形に — 発掘！私たちの宝物「伏見遺産」 —

川邊 甲余子（奈良市立伏見小学校）

I はじめに

本実践は、世界遺産学習として、伏見小学校区にある「残されてきた」「守られてきた」「守っていききたい」場所について主体的に調べ、伏見小学校区の良さに気づき、地域の一員として思いを深めることをねらいとしている。

本校区には、西大寺をはじめ菅原天満宮などの歴史的な建造物や八栗池などの古くから残されているものが多くある。地域の良さや特色を捉えるにあたり、恵まれた環境である。そこで、伏見小学校区に「残されてきた」これらの周辺の環境が残されているのは地域の人々の思いや努力によって「守られている」ことについて考え、児童が地域の一員として今後も「守っていききたい」という自覚を持てるような実践を目指した。

II 指導について

本単元は、世界遺産の登録の疑似体験をしていく学習であった。

夏休みの宿題で、日本の世界遺産について調べてた。それらをもとに、『つかむ』では、世界遺産の意義について調べ「残していく」ことの努力や苦労、世界遺産に登録させるときに登録基準があることに触れる。

『調べる』では、世界遺産の重要性を知ったのちに、伏見公民館の館長から伏見小学校5年生を伏見観光大使として伏見遺産を発掘するように依頼が来ることから、伏見遺産について考えていく。伏見遺産に登録するにあたり、事前に学んだ世界遺産の登録基準から、伏見小学校校区の登録基準を考える。それらをもとに伏見小学校区の「残されてきた」「守られてきた」「守っていききたい」ものを捉え、各クラスエリアごとに調べた。

『広げる』では、それぞれの伏見遺産について調べた後、それらを多くの人に伝えていくために模型を作成する。模型の作成にあたり帝塚山大学現代生活学部居住空間デザイン学科北澤嘉浩教授による講義、学生ボランティアには模型のアドバイスをもらった。

『深める』では、これらを展示したのち、伏見遺産の魅力を発信する。『調べる』の段階で考えた伏見遺産登録基準を事実とし、学年の児童を説得できるような報告文を作成した。そして、福岡県宗像市立玄海小学校の6年生とオンライン交流をし、奈良県にある地域の魅力を発表した。その後、これらの学習を通して、わたしたちがこれからも伏見遺産を「守っていく」ために必要なこととは何かを話し合いをし、学習のまとめを行った。

III 実践を終えて

児童が大切にしている「モノを作る楽しさ」を生かした実践であった。模型が完成すると模型そのものや模型を作った場所について愛着を持ち、その場所に関わる人に話を聞きに行っていた。さらに、「次に繋げていきたい。」「知ってもらいたい。」と休みの日にゴミ拾いにいったという児童もいた。このことから「伏見遺産」を通して、地域の良さを守るために一人一人が考え、行動することの大切さに気づいた実践であったと考える。

自ら学び、主体的に課題を解決し、未来社会を切り拓く資質・能力を 身につけた生徒の育成

—SDGs達成のためのESDの視点を取り入れた教育実践—

高良 直人（沖縄県那覇市立松島中学校）

I はじめに

（1）松島中学校の紹介

松島中学校は那覇市の首里城に向かう中腹に立地している。
校舎からは、那覇の町並みや東シナ海が一望でき、隣接する末吉公園には
自然豊で多くの生物・植物が生息しており、教育環境にも恵まれている。
創立63年目を迎え、生徒数は631名で、沖縄県内では大規模校である。

II 研究の実際

（1）松島中学校の校内研究について

- ①研究主題～研究仮説
- ②研究方針～研究の内容（研究構想図）
- ③SDGsカレンダー～SDGsマトリックス～ESD単元配列表

（2）研究の実際（各部会の研究）

- ①推進部会～教科部会～道徳・特活部会～総合的な学習の時間部会
- ②「一人一授業」の研究授業の実践
（ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の育成）

III ESDの視点を取り入れた特色ある教育実践

（1）末吉公園フィールドワーク

- ①環境保全教育

（2）すい（首里）まちま～い

- ①自然と歴史と文化の継承

（3）その他、松島中の特色ある実践

- ①キャリア教育「NAHA未来City in School」
- ②那覇市子ども議会「10年後のより良い那覇市を目指して」
- ③SDGsパスポートを活用した生徒会活動
- ④地域伝統行事「那覇ハーリー」「旗頭フェスティバルin那覇」への参加

IV 研究の成果と課題

（1）成果

- ①ESDやSDGsへの興味・関心が高まった。

（2）課題

- ①2年間で培っている研究テーマを持続させていく手立てについて。

～プレゼンを作っている最中なので、発表の中身に関しては若干変更があります～

地域の空き家&店舗の利用価値の創造 —高校生が考える・自分とまちの関わり—

臼井 達也（NPO法人わかやま環境ネットワーク）

I はじめに

和歌山県立箕島高等学校で2021年から導入されているSDGsベースの教育プログラム。その中の「まちづくり」というテーマから、毎日通っている学校の周辺地域について目を向け、そこにある課題への気づきと対策を自らの頭で考え、答えを導き出す。そして、空き家、空き店舗に着目した上で、これらの有効活用について検討する。さらに実際の改修作業を経て、持続可能な社会づくりとの関わりに対して、大変さやおもしろさを感じ、未来への可能性を学ぶことを目的とする。

II 実践概要

- (1) SDGsの11番「住み続けられるまちづくりを」で必要とされる要素を分析し「衣食住」という言葉から、暮らしのベースである住まいに着目
- (2) 市役所のまちづくりの担当を招き地域の現状について情報を得る
- (3) 学校の周辺を街歩きし、どのような課題があるかを考える
- (4) まちと自分たちとの接点機会である「放課後」に着目し、全校生徒を対象に「放課後の過ごし方」についてのアンケートを実施
- (5) 集計結果から抽出された「居場所」の必要性和実現について検討（写真1）
- (6) 通学路途中にある空き店舗の改修に向けて、希望やアイデアを創出
- (7) 建築や施工等の専門家を講師に招き、ヒントを得ながら改修を計画



写真1：集計内容の検討

III 考察

生徒たちは授業を通じて、日々の学校生活では考えることのなかった新たな視点を持つことができた。少しずつだが、その中で自らの潜在的な疑問や違和感、そして「こうなったらいいのに」という要望に発展しつつある。さらに、具体的な動きの中で得られる「職業体験」や関わる専門家の姿を見ることで、やがて訪れる「社会人」としての自分自身のあり方について何かを感じてもらえることを想定している。実際の改修計画では理想的な「居場所」としての機能面のほかに「断熱」についても取り扱っていく。実は、和歌山県は比較的暖かい地域であるがゆえに、住宅や店舗は断熱性能が乏しい傾向にある。これはエネルギーの浪費に直結しており、持続可能な社会からの乖離のひとつであることも伝えていく。こうしたさまざまな要素から、放置された物件の活用が持続可能な社会構築にとって必要である、ととらえることで、地域の現状や課題を見つめ続ける「目」が養われることをめざしてゆく。

地域とつながる、社会とつながる、天明未来創造学 —明日はもっといいEARTHへ—

堀尾 綾子（熊本市立天明中学校）

I はじめに

本校の教育目標は「自主・協働・貢献」である。自ら課題や目標を見つけ、他者と協働しながら課題を解決したり、新しい価値を生み出したりすることで、地域や社会とのつながりを持ちながら貢献できる生徒の育成である。このような本校の教育目標は「持続可能な社会の創り手」を育成する「ESD教育」と親和性が高いことから、今年度はSDGsへの取り組みと関連づけながら「ESD教育の6つの視点と育てたい7つの能力・態度」を学習指導計画に位置付け、生徒が主体的に学びに向かう授業づくりを研究の柱としている。しかし、どのようにESD教育を展開していくか模索している状況でもあるため、今年度は「ESDティーチャープログラム」に全職員が参加し、教師自身が理解を深めている段階でもある。

また本地域は平成19年度に、住民と農業団体、学校機関等の16団体による「天明環境保全隊」を立ち上げて、地域で農地・水・環境保全活動を小中学生と地域住民との協働で行う体制を整えている。同保全隊は環境保全活動に加え、小中学校と連携した出前講座・森の育樹・虫の飼育など長年継続している。また、本校生徒も保全隊の一員として地域活性化に貢献している。

II 実際の概要

(1) 天明未来の森づくり体験（地域と協働した体験活動）

- ・上流の森林整備を行う「漁民の森づくり事業」に参加し、木の成長を妨げている草を刈る作業「下草刈り」の実施。
- ・環境保全隊の一員として地元の環境を守り育て、地域を大切にする次世代の担い手を育てることをねらいとする。



(1) 下草刈りをする生徒たち

(2) 天明未来創造学（総合的な学習の時間（学年）＋委員会活動（縦割り））

- ・「学年探究SDGs」→各学年で、SDGsに関する基礎理論を学んだ後、各教科で身に付けた知識や見方を働かせ、学校、地域への問い立てを行う。個人やグループで課題解決、改善提案を探究し、校内・地域へ発信。
- ・「専門探究SDGs」→異年齢の縦割り構成で、SDGsの17のゴールに着目し、委員会活動と関連づけながら、達成に向けた探究活動の実施。



(2) SDGs基礎理論の授業

III 成果と課題

○学習活動の中で、生徒たちは「ESD教育で身に付けたい資質や能力」を基に振り返り、修正を行いながら「行動の変革」への意識の高まりが見られた。

▲今後は、地域企業や行政との連携、ゲストティーチャーの確保を行うことで、生徒が自ら課題を追求、解決する主体性の向上と行動の変容を見取っていききたい。

▲天明版ESD教育の継続、及び、カリキュラムマネジメントをさらに工夫し、ESD教育の推進を各教科の授業、全教育活動で行うホールスクールアプローチについて研究を進めたい。

災害から人々を守る活動 —過去の災害から学び地域の防災意識を高める—

紺谷 隆（奈良市立東登美ヶ丘小学校）

I はじめに

本実践は、第4学年社会科「災害から人々を守る」の単元において、大和川大水害についての学習から地域で起こった水害を自分事としてとらえ、市町村を中心に関係機関が人々を守る活動、備えをしていることを理解すること、自分たち、地域の防災意識を高めることを目指した。

児童が律動的に活動を行うために自ら学習課題を設定し、調べ、聞き、話し合い、そして伝えるという活動を取り入れた。また、学習の最後に帝塚山大学や奈良市消防局の協力のもと防災運動会を開き、児童が楽しく学び、これからの防災について主体的に関ろうとする態度の育成に繋げた。

II 実践の概要

社会科の時間＋総合的な学習の時間＋食育指導＋図工

(1) 学習課題の設定

- ・家の人は、どんな災害に出合ったのだろうか。
- ・大和川大水害から人々を守る活動について学習課題を作ろう。

(2) 大和川大水害から人々を守る活動

(3) 将来の水害から人々を守る活動

- ・将来の災害に備えて誰がどんなことをしているのだろうか。

【ゲスト：奈良市危機管理課、自治連合会会長】

(4) 防災について深く考えよう

- ・自分たちの地域ではどのような備えが必要だろう。

【ゲスト：帝塚山大学学生、BMC防災研究所防災士 川口均】

(5) 将来の災害に備えて、自分たちにできること

- ・西日本豪雨の記録を読んで、自分たちにできることを考えよう。

(6) 防災運動会を開いて、防災意識を高めよう

【ゲスト：帝塚山大学、奈良市消防局、保護者、地域の方】

(7) SOSフラッグを作っておこう（図工）

(8) 防災食を食べてみよう（食育）

III 考察

「だれが、どのようなことをして、守っているのか。」を単元を通して考え、社会の人々が自分たちの生活を支えていることに気づくことができた。ふりかえりでは、地域の人や大人の人に感謝を込めて挨拶をしたい。と書いている児童もいた。また、防災運動会を行うことで保護者や地域の人とともに地域の防災意識を高めることができた。

時代を超える旅に出よう

—宮沢賢治が描いた世界—

河野 陽一（福岡市立飯原小学校）

I はじめに

本単元は、今から13年前に発生した東日本大震災をきっかけとして開発された。その後、熊本地震、九州北部豪雨をきっかけに、単元を新しい流れに組み直しながら、4度の実践を行った。時代を超えて今尚大切にされる「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という宮沢賢治の考えをとらえるために、作品世界と実世界を重ねる教育活動にも挑戦した。

II 実践の流れ

- (1) 「注文の多い料理店の序」と詩「雨ニモマケズ」を読む。
 - (2) 「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方や考え方をとらえる。
 - (3) 「注文の多い料理店」を読み、宮沢賢治が描いた世界について考える。
 - (4) 「やまなし」を読み、宮沢賢治が描いた世界について考える。
 - (5) 複数の宮沢賢治作品を重ね読み、宮沢賢治が描いた世界について考える。
- 【「やまなし」と重ね読みする作品】
- 「注文の多い料理店」「オツベルと象」「よだかの星」「なめとこ山の熊」
 「北守将軍と三人兄弟の医者」「雪渡り」「風の又三郎」「雨ニモマケズ」
 「銀河鉄道の夜」「グスコブドリの伝記」「セロ弾きのゴーシュ」「度十公園林」
- (6) 自己評価カードへの記録や宮沢賢治さんへの手紙をもとに単元をふり返る。

III 宮沢賢治の時代を超える考え方を軸にした年間カリキュラムマネジメント表

総合的な学習の時間 「生きる力を支える人・もの・ことに出会い、生き方や将来の展望を伝えよう」 国語科を軸に、様々な教育活動で出会った生きる力を支える人・もの・ことをもとに自分の生き方や将来の展望について考え、スピーチ形式で伝え合う。	道徳 「利他」 東日本大震災で被災した子どもが懸命に働く姿から自己犠牲の精神の魅力について考える。	道徳 「命をいただく」 食物連鎖のアンカーとして人が生かされていることや動植物の命をいただいていることを感じる。	当番活動 一人一役の当番や給食当番の仕事に責任をもって取り組むことが、集団生活を進めていく上で大切なことに気づく。	係活動 よりよい学級を築いていくために自主的・主体的に行動することが自分の力を役立てることになることを経験する。	委員会活動 所属する委員会で「Think Globally, Act Locally.」の見方・考え方で行動する素晴らしさを体験する。	
国語「時代を超える旅に出よう～宮沢賢治が描いた世界～」 【主に育てたいESDの資質・能力】 【批判的に考える力（クリティカル・シンキング）】 作品の主題に迫るような読み方ができているか、命の循環を考えた行動ができているか、自分の学び方や生き方を見つめ直すことができる。 【多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）】 宮沢賢治作品を「命のつながり」を軸に重ね読み、作品の類似点（「かわせみの生き方」や「やまなしの生き方」）に着目することで、作品と作品をつなげて宮沢賢治作品の主題を複数の作品の叙述を根拠にして読み深めることができる。 【コミュニケーション力】 宮沢賢治作品から読み取った自分の考えを「5つの視点による感想」や「考えフリップ」という形式でまとめ、聴くことに主眼を置いた「聴き合い活動」を中心に交流することで、互いの考えを比べながら自分の考えを広げたり深めたりすることができる。 【進んで参加する態度】 宮沢賢治の作品を進んで読書し、複数の作品の叙述を根拠にして作品の主題を考えたり、友達と考えを進んで聴き合ったりして、自分の考えを深めたり広げたりしようとしている。						【主に育てたいESDの価値観】 【世代間の公正を意識できる】 宮沢賢治の作品と伝記を重ね読み、「宮沢賢治が描いた作品世界・宮沢賢治が生きた時代背景」と「今の時代を取り巻く地球規模の諸問題」をつなげて考えることは、時代を超えて今尚大切にされる「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という宮沢賢治の考えをとらえることにつながる。 【自然環境や生態系保全を重視する】 宮沢賢治の作品と伝記を重ね読み、自然環境や生態系に配慮した生き方・考え方を読み取ることが、地球環境への負荷を下げ、「豊かな生産」「豊かな消費」の維持・実現に向けた生き方・考え方を育むことにつながる。 【幸福感を大切にすること】 宮沢賢治の作品に描かれた「命の循環」を読み取ることが、個人の幸福だけでなく世界全体の幸福を考え、身近な行動の変化をうながすことになり、「幸せを感じる心」を育むことにつながる。
社会（歴史） 柳宗悦、杉原千畝、田中正造、南方熊楠、岡倉天心などから、誰かのため、何かのために行動する生き方の歴史的価値について調べる。	理科（生物の関わり） 植物を出発点とした、「食べる・食べられる」という関係で1本の線のようにつながっている生物の間のつながりである「食物連鎖」を調べる。	家庭科&歓迎遠足 保護者といっしょに食材の購入や弁当作りに取り組むことを通して、食材選びの工夫や料理から食事までに関する興味・関心を高める。	給食指導 福岡で獲られたブリを活かしたギョロツクについて学ぶが通して、地産地消による生態系の保持や漁獲量の維持について考える。	読み聞かせ 本橋成一のドキュメンタリー写真絵本の「うちは精肉店」を通して、命をつなぐ仕事や、その仕事に支えられている自分たちに気づく。	行事（修学旅行） 原子爆弾投下による甚大な被害を受けた長崎の地において、平和と復興に向けて懸命に行動した永井隆博士の生き方について調べる。	音楽発表会 宮沢賢治が作詞・作曲した「星めぐりのうた」を聞いたり歌ったりすることを通して、自然の美しさを音で味わう魅力を感じる。

IV 手立て

- (1) 並行読書を軸にした読書活動の工夫
- (2) 聴き合い活動を軸にした交流活動の工夫
- (3) 思考の可視化を促す思考ツールの工夫
- (4) 聴き合い活動後や単元終了時における自己評価活動の工夫

V おわりに

時間と空間を超えた宮沢賢治の考え方を学ぶことが、児童が世界ぜんたいに寄り添う心の醸成につながるのであれば、幸いである。

動物専門学校でのESD実施の可能性

武分 渉（アドベンチャーワールド・AWS動物学院）

I はじめに

動物園や水族館には社会的役割の一つとして教育・環境教育があり、子どもが体験を通して動物や環境との関わりを学ぶ場として可能性を有している。学校などの教育機関との連携、施設利用の促進が望まれるが、有効的な利用に繋がっている事例は少ない。

動物の専門学校では、将来的に動物園や水族館で教育の重要性について理解し、積極的に携わる人材育成に重点を置く学校も多い。

II 概要

私が在籍する AWS 動物学院はアドベンチャーワールドに併設されている、動物飼育について学ぶことができる教育機関である。持続可能な社会の実現に向けた質の高い教育を目指す上で、将来動物園や水族館で働く学生を対象とした、ESD 学習の導入をしていきたい。

その中でも、動物ガイド講座では、学生が主体性を尊重し、将来動物園や水族館など野生動物との関わりを通して来園者に動物の魅力を伝えるための授業構成をしており、2024 年度内の動物ガイド講座の授業カリキュラムにて、ESD の要素を含めたレクチャーの企画構想や、学習計画の作成を試みたいと考えている。

学生には動物園水族館において、施設の特徴を生かした ESD 学習プログラムを考える授業展開とし、例えば身近な生態系であったり動物の命など理科や道徳、総合で扱うテーマをもとに、ポイントを絞り簡略化した単元構想図や企画書を作成し、実践に移すことで ESD に必要な視点、育てたい資質・能力、価値観を踏まえた授業ができ、今後社会で ESD の観点を取り入れたプログラムを理解し提供できる人材を育成できるのではないかと考える。

III 施設紹介

【AWS 動物学院】

AWS 動物学院は、アドベンチャーワールドをキャンパスフィールドとし、「人間（ひと）と動物と自然とのふれあい」を教育活動のテーマとして、野生動物飼育管理と社会人前教育を学ぶ専門学校である。

【アドベンチャーワールド】

温暖な紀伊半島の和歌山県白浜町にある陸、海、空の 140 種 1,400 頭の動物が暮らす「ここにスマイル未来創造パーク」をテーマに掲げたテーマパークである。

地域の宝「久万川」を守るために —総合的な学習の時間「住み続けられるまちづくり」の実践—

三浦 智子（愛媛県松山市立久枝小学校）

I はじめに

本校が位置する安城寺町には、「川狩り」という伝統行事がある。豊作と安全を願い、神輿を川に運び入れ、歌を歌いながら川の水をかけて神輿を清めるという神事である。90年近く続いているが、一時期、川の水の汚染が原因で実施できていない期間があった。それを残念に思った地元団体が川の水質向上のために働き掛けたり、川に入らなくても行事ができるよう会場設営を市に懇願したりという苦労の末、やっと実現できたという歴史がある。

本校の子どもたちは、毎年総合的な学習の時間に、その歴史をまちづくり協議会の方から学び、神輿を手作りしたり、歌を覚えたりして、模倣した「川狩り」を実施している。

本実践は、4年生で「川狩り」を経験した子どもたちが5年生になってからの単元について、3年間にわたって研究し練り上げてきた内容である。



II 実践内容

令和4年7月に行った「川狩り体験」

（1）「川狩り」をSDGsの視点で見つめ直した1年目

「地域の伝統行事を受け継いでいってほしい」という地域の方々の思いに触れたことをきっかけとして、川の水質を悪化させない取り組みについて考えた。その際、教員からSDGsについて紹介し、地球環境を守る必要性などについて考えさせた。子どもたちはSDGsについて広く学び、それを校内や近隣の小中学校などに伝えた。

（2）地域の学校と連携し、単元を見直した2年目

1年目の実践をきっかけに、本校教員がESDティーチャープログラムに参加した。そこで学んだことを基に、5年生の総合的な学習の時間の単元構想を全教員で作成し、練り合った。大学や県・市、地域の人材、近隣の小中学校の教員などの協力を募った。子どもたちが大人の力を借りることを通して、大人を巻き込んで活動を広げていくことが社会を変えることにつながると気付かせようと試みた。

（3）子どもたちの思いをつなげた3年目

2年間の単元構想を基に、筆者が授業者として実践した。子どもたち主体の活動を行うことができた。地域の一員としての自覚や、地域づくりに貢献できたという達成感や仲間意識を持たせることができたが、さらに取組を広げたり、地域に紹介したりしようとしているところである。今回の取組が子どもたちの意識に残り、未来に向けて自分ができることを継続して行っていってほしい。

いこしょうアップデート —大根 大作戦！—

泉谷 利恵子・安田 有輝・新井 賢太郎・福林 倭吹
(奈良県生駒市立生駒小学校)

I はじめに

本校の特別支援学級は全7学級あり,知的11名,情緒16名,病弱1名,弱視1名の全29名が在籍している。毎週火曜日の1.2時間目に行っている自立活動では,季節ごとの野菜を植えて,収穫までの世話をする栽培活動も行っている。

本校で行われたESD研修を受け,この栽培活動はSDGsの8番「経済成長と雇用」15番「陸上資源」16番「平和・公正」の視点と関連付けられると考えた。そこで「自分たちが通っている学校の環境を自分たちの手で保ち続けるにはどうすればよいか」というテーマを設定し,自分たちが育てた野菜と,経済活動の一連の流れを組み合わせることで,自分事として意欲をもった取り組みを行うことにした。

II 活動の流れ

8月	よりよい小学校について考える。 大根を植える。
9月	お店の工夫を考えるうえでの模型作り。
10月	お店の工夫を考える。
11月	八百屋見学。 見学内容のまとめ。 お店作り① お店作り② 接客の工夫など見学で気づいたことの確認。
12月	野菜の収穫・販売。
1月～	販売で得たお金の使い方を考える。 学校をよりよくするために活動する。

III 考察と今後の展望

今回の取り組みを通して、生駒小学校をよりよくするために、いこま学級としてできることは何かを考えた。また、お金を稼ぎ、そのお金で必要なものを買ってそろえるという経済の循環も経験することができた。

今後は、野菜を売って得た収益で生駒小学校をより良くし、保護者や地域の方々、教員から感謝されることを通して、自己有用感を高めたい。そして、自分にできることは何かを考え、行動できる力を育んでいきたい。

【ESD 講演会】 1月6日(土)15:45～17:00

「持続可能な未来のために ― 人と自然との共生とは ―」

講師:NPO 法人 共存ネットワーク理事長 澁澤寿一氏

1952 年生まれ。国際協力機構専門家としてパラグアイに赴任後、長崎オランダ村、ハウステンボスの企画、経営に携わる。全国の高校生 100 人が「森や海・川の名人」をたずねる「聞き書き甲子園」の事業や、各地で開催する「なりわい塾」など、森林文化の教育・啓発を通して、人材の育成や地域づくりを手がける。岡山県真庭市では木質バイオマスを利用した地域づくり「里山資本主義」の推進に努める。明治の実業家・澁澤栄一の曾孫。農学博士。

屋久島型ESDの充実を目指して —総合的な学習の時間「屋久島の未来のために」の実践より—

稲留 愛（鹿児島県屋久島町立宮浦小学校）

I はじめに

屋久島は、世界自然遺産登録から今年で30周年を迎えた。屋久島型ESDとは、屋久島を持続可能な社会にするために、世界自然遺産を素材にした学習を通して、直接体験（自然、文化等）と地域の人とのつながりから、「学び、考え、行動する力」と「自尊感情」を高め、「生きる力」を育成することを目的としている。しかし、本校を始めとする島内の学校において、離島勤務歴が3～5年で入れ替わる教職員の実態から、屋久島型ESDの推進や教材・人材開発にかかる時間と蓄積がなかなか継承されにくい課題があった。

そこで、本実践は、屋久島型ESDの考えに基づき、屋久島の抱える課題について取り組む大人との関わり（屋久島町が委嘱しているESDアドバイザーやグローバルアドバイザーの活用）を通して、持続可能な社会を作ることの必要性について理解し、よりよい未来に向かって自分たちにできることを考えたり、発信したりすることができるようになることをねらいとした。

II 授業実践

所属校（屋久島町立宮浦小学校）で担任している第6学年の児童27名を対象に、9月から12月にかけて「屋久島の未来のために」（全28時間）と題して実践を展開した。

屋久島の現状から課題を捉えるために、屋久島町が委嘱しているESDアドバイザーを招き、講話や対話を行う中で、屋久島の様々な課題（水質、漁業、ごみ、観光、外来種、人口減少）に気付くことができた。

また、屋久島の課題に直面する体験活動を取り入れたり、それらの課題について取り組む大人との関わりもったりすることで、地域の実態をより正確に把握し、これからの活動に具体性をもたすことができた。

さらに、地元の高校が主催する環境フェスタやESDアドバイザーの方々が主催する屋久島未来会議等のイベントで発信する機会を設定することで、自分たちの取組や提案を拡散したり、ESDの造詣が深い方々から意見をもらったりすることで、新たな視点をもつことができた。また、来場される方々に合わせたプレゼンテーションを用意する等の相手意識をもって取り組むことができ、人とのつながりの心地良さや関係を深めるコミュニケーションスキルの向上を図ることができた。

III 成果と課題

- ESDアドバイザーを活用することで、屋久島型ESDの推進と共に、児童の探究課題に沿って学習の伴走を行うことができ、児童主体の探究的な活動が開かれた。
- 直接体験を休日や祝日に行うことがあり、保護者の協力が必要となった。

小呂島の未来と私

—小呂島を持続可能な島とするためのESD—

枝広 隆志 (福岡市立小呂小学校・小呂中学校)

I はじめに

本校は、玄界灘に浮かぶ周囲3.5km、人口約150人の小さな離島、小呂島に位置する施設設備一体型の小中併設校である。小呂島は、1645年、黒田藩の藩命による入植開始から約380年、豊富な水産資源を背景に漁業の島として、独自の文化を発展させてきた。平成20年頃まで、常に人口は200人程度を維持し、過疎に喘ぐ全国の有人離島の中でも稀有な存在であった。

しかし、近年、急激な気候変動等の影響を受け主要産業である漁業は不振を極めている。経済的にも厳しい状況が続く、島を離れる島民も急増し、人口は25%程減った。高齢化も加速し、最盛期に62名いた全校児童生徒は、現在11名。小呂島を有人等として存続させるため、様々な取組を試行錯誤しているところである。本校においても児童生徒を島の未来を支える主体となる人材に育成することが期待されており、その手段として全校をあげてESDに取り組んでいるところである。

II 目指す児童生徒の姿と学習の流れ

本校のESDにおける目標は「小呂島の持続的发展を願い、その主体となり行動する児童生徒」を育成することである。そのために、まず児童生徒に小呂島について深く理解させなければならない。小学校中学年までは、島の自然、産業、文化など島の良さを知り、郷土小呂島を愛する児童を育成することに主眼を置く。高学年になると、その島を支える人に焦点を当て、小呂島の魅力を島外の人々に向け発信する力を養う活動を展開している。

中学生では、近年の漁業の不振や人口の減少など、影の部分にも向き合い、それを解決する手段を考え、島民と語り合ったり、他の離島の中学生と意見交流したりしながら考えを深め行動化を図っている。決して楽観的な現状ではないが、島の未来を創っていく主体となる決意をもち、島の未来に希望をもって本校を旅立たせる取組を行っている。

III 実践の中から ～「全国離島学校サミット」の取組～

令和4年度から「全国離島学校サミット」という交流組織を立ち上げ活動を開始した。今年度で、2年目の取組になる。

この組織は全国の有人離島に位置する中学校で組織され、年間3回の交流学習を行っている。この組織には、離島校という共通点もありながら、気候、風土、島の規模、産業構造等様々な学校が加盟している。生徒たちは、離島に暮らすという共通点からくる喜びや願いを共有しながらも、それぞれの島の違いから多様性を感じ取り、それぞれの島を大切にしたいという思いを深めている。

この取組を中心に郷土小呂島を誇りに思う気持ちを深め、その思いを行動に移すことのできる生徒の育成に努めているところである。

だいすき！山辺町！

一町たんけんてぼくたち・わたしたちの山辺町はっ見一

太田 馨（山形県山辺町立山辺小学校）

I はじめに

本実践は、2年生生活科「町たんけん」の学習を通して、ESDの学習における素地を養うことをねらう。

子どもたちが住む山辺町には、子どもたちがまだ知らない「人・もの・こと」が多くある。それらを発見し、また、地域の人々と交流することを通して山辺町により愛着をもてるようにする。そして、その愛着が、今後SDGs・ESDの学習を、地域を題材にして行う際に、自分事として学ぶことにつながるができるようにしていきたい。

II 授業の概要

（1）山形県山辺町について

山形県山辺町は、県庁所在地である山形市の西隣に位置している、人口およそ14000人（令和2年時点）の、繊維工業などが盛んな町である。子どもたちは、その中でも住宅地や商店が立ち並ぶ中心部である山辺地域に住んでいる。また、両親や祖父母も昔から山辺町に住んでいるという家庭も多い。

（2）授業の流れ（全15時間）

- 1 山辺町について知っていることを挙げる。
- 2 1回目の町探検の計画を立てる。
- 3 1回目の町探検に出かける。
- 4 町探検で見つけたことをまとめる。
- 5 2回目の町探検（町の人へインタビュー）の計画を立てる。
- 6 質問したいことをまとめたり、インタビューの練習をしたりする。
- 7 2回目の町探検に行く。
- 8 調べたことをポスター形式でまとめる。
- 9 見学先の人や1年生に、学んだことを発表する。

III 成果と課題

①成果について

本実践でねらっていた「子どもたちが山辺町にもっと愛着をもつ」というのは達成できたように思う。「〇〇には、こんなところもあったんだね！」「△△屋さんでは、こんなこともしていたよ！」など、目を輝かせて発見したことを話していた。

②課題について

気づきの質をもっと高められたように思う。今回はどちらかと言ったら人とのつながりに偏った指導をしたところがあった。植物や動物など、自然とのつながりにも目を向けさせ、より広い視野で山辺町に愛着をもてるようにすると尚よかったと思う。

地域応援プロジェクト

— 商店街を盛り上げるために、立ち上がろう —

竹田 光陽（奈良県生駒市立生駒東小学校）

I 「商店街には、なぜ多くの人々が足を運ぶのだろうか」

社会科「店ではたらく人びと」の学習をしている中、「商店街にはなんでいつも人がいるんだろう」という児童の素朴な疑問から、この学びが始まった。

生駒駅周辺には、百貨店、スーパー等、人々が生活するにあたって必要な店が立ち並ぶ。しかし、駅から少し離れた位置にある商店街には、なぜか人が途切れることがないという疑問が子ども達から声が上がっていった。

この疑問を探究していく中で、校区に住む人々の強い思いや、商店街を存続させようとする地域の人の努力や動きを知り、自分達にも何かできないかと考えるようになった。そして、商店街周辺のお店に自分達でアポを取ったり、ゲストティーチャーを招く声かけをしたり、積極的に情報を集める動きにつながっていった。

II 当事者意識が学びを創る

校区にある商店街は、ずっと変わらなかったのだろうか

商店街の中には、何世代にもわたって、100年以上営んでいるお店の存在を知る中で、商店街の誕生や変化について調べてみたいという思いを児童が抱くようになった。

商店街に行ってみよう

地域に根ざして仕事を続けている方の思いを知るために、長年この商店街で営業してきた文具店の方に、話を聞く活動を児童が考えた。

数あるお店の中で、この商店街で買い物をする人が多くいる不思議について知るために、街頭インタビューをしたり、商店街を行き来する人の様子を観察したりする活動を行った。

数あるお店の中で、この商店街で買い物をする人が多いのはなぜだろうか

これらの活動を通して、「安さだけではなく、人と人が信じ合う関係があること」が買い物で大切にされてきたことを知ることになった。「親もこの商店街で買い物をしてきたから」という信頼のバトンが、人々の心にあることや、物の売り買いだけでなく、目には見えない大切なものを渡し合ってきたことが、この商店街を支えてきた大切なものだという気づきにつながっていった。

「知りたい」から「やってみたい」へ

商店街のように、今ある「校区の中にあるステキ」をこれからも受け継いで行くためには、自分たちがステキを発信することが有効なのではないかと児童が気づいていった。

そこで、Google Canvaを使って応援ポスターを作り、商工会議所や生駒市役所SDGs推進課、または各店舗にポスターを持参して掲載してもらったことや、新聞社に児童の活動について記事を掲載してもらったこと等により、児童発信の活動が認められ、感謝される経験を児童にさせることができた。

III 今後の見通し

自分達が作ったポスターにより、人が集まり地域を活性化できた経験を活かし、気づき、発信しようとする心を引き続き育てていくことを考えている。

中学家庭科×郷土食×MLGs

—ふなずしから考える持続可能な郷土の未来—

伊藤 由季（延暦寺学園比叡山中学校）

I 実践のねらいとMLGs

マザーレイクゴールズ(MLGs)とは、琵琶湖を切り口とした2030年の持続可能社会の実現を目指すゴールのことで、琵琶湖を通じて自分たちの活動がSDGsにつながっていることを発見するための仕組みである。今回、家庭科にしかできないアプローチの仕方でのMLDsの実現を



1 MLGsと13のゴール

目指したいと考え、その題材として「ふなずし」を選んだ。ふなずしの千年の歴史を紐解く中で、まずはその多様な価値に気づかせたい。そして、そのふなずしが日常食から失われつつある過程を批判的に考察することで、地域の自然とそこに住む人々が育んできた食文化の行く末は、一面において、その地域の自然環境に左右されることに気づかせ、持続可能な郷土の未来の担い手としてどのようにMLDsに貢献できるか、その具体的手段を検討させたい。

II 実践の概要（全14～15時間）

- (1) 自由研究「滋賀の郷土料理」〔夏季休暇課題⇒1分間研究発表会〕
- (2) 滋賀の郷土食とその形成要因
- (3) 湖魚の抱える課題〔事前アンケート「湖魚に関する実態調査」の分析〕
- (4) 調理実習「アメノイオご飯、コアユの佃煮、シジミ汁」
- (5) 出前授業①「ふなずしという食文化と伝統的な加工方法」
- (6) 出前授業②「琵琶湖の環境と生態系」
- (7) 出前授業③「ふなずしと琵琶湖の未来を漁業者さんと一緒に考える」
- (8) 「持続可能な郷土の未来づくり」をテーマとする啓発ポスター製作

III 実践の特徴

この実践では、三分野のゲストティーチャーをお招きする。

- ・出前授業①⇒ふなずしの加工業者の方
- ・出前授業②⇒県水産課の方
- ・出前授業③⇒漁業者の方

実践の中に社会のリアルを持ち込むことで思考が深まる契機としたい。また、ゲストティーチャーの郷土を守り愛する心情に触れることで、その心情への深い共感を引き出し、MLDs実現のための動機づけとしたい。



2 湖魚の抱える課題をグループ毎に分析

情動的な国際交流

ーテディベア・プロジェクトやオンライン交流をとおしてー

中村 僚太（和歌山県白浜町立白浜中学校）

I はじめに

海外交流において、単に一時的な交流で終わってしまうことのないよう、より情動的な方法を試みた。オンライン掲示板や動画交流、そしてテディベアを留学生に見立てて送り合う等、よりお互いを身近な存在として感じるための仕掛けを施した。

II 取り組みの概要

(1) オーストラリアとの交流

① 留学生の受け入れ

本年度、2回にわたり1週間程度オーストラリアの生徒3名を受け入れ、3年生2学級と2年生1学級で交流を行った。

② オンライン交流

月1回、テーマを設定し、英語の授業内でZoomを通して交流を行った。

③ テディベア・プロジェクト

双方でぬいぐるみを用意し、それを「留学生」という体で相互に送り合った。お互いの留学生がどう過ごしているのか、そのようすをA4一枚にまとめ、定期的に伝え合った。

(2) ニュージーランドとの交流

① 動画交流

歌をうたっている動画等を撮影し、お互いに送りあった。

② Padletによる交流

オンライン掲示板「Padlet」を使用し、24時間いつでもつながれるような工夫を行った。

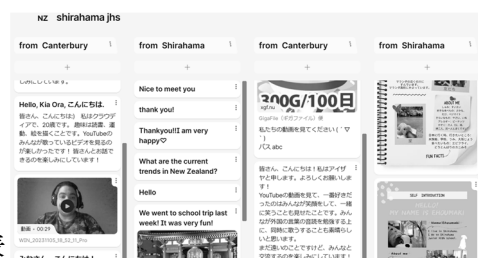
③ オンライン交流

12月頭Zoomにて実施予定。

(3) ともに作り上げる舞台発表

① 「つながり」をテーマとしたダンス発表

オーストラリア、ニュージーランドの学生たちにダンスを踊ってもらい、それを撮影した動画を流しながら会場で実際に中学生や教師が踊る発表を行った。



III 成果や課題

アンケート等はまだ実施できていないが、生徒たちの反応を見ると、視野が海外にまで広がっている場面がはしばしに感じられた。また、全国学習度到達調査では、英語に対する関心の向上が見られた。

自ら学び、考え、行動する子どもを育てるESDの実践 —学びのつながり、人とのつながりを大切にした学習を通して—

橋口 和真（鹿児島県屋久島町立八幡小学校）

I はじめに

屋久島は、地理、歴史、産業、エネルギーなど、ESDに関わるどの分野においても充実したポテンシャルを持つ地域である。屋久島町全体で、持続可能なまちづくりをかせ、教育現場でも、10年以上にわたりESDの実践が重ねられてきた。

本校は、「自ら学び、考え、行動する子どもを育てる」をESDの目標とし、学びのつながり、人とのつながりを大切にした学習を行っている。

II 実践の概要

第3学年・第4学年 総合的な学習の時間 「発見、発信、屋久島の自然」

(1) 学びのつながりを大切にした学びの構想

① 屋久島型ESD・キャリア教育の構想

屋久島町では、屋久島型ESD・屋久島型キャリア教育全体構想を設定しており、幼児教育から高等教育に至るまでに、「屋久島の」何を学ぶかを明確にしている。これにより、縦のつながりを意識した学びの構想ができる。

② 二学年合同の学習計画

本校では、総合的な学習の時間の学習計画を、3・4年合同、5・6年合同で設定している。これにより、昨年度の学びからつながる、新たな学びの展開が期待できる。

③ 総合的な学習の時間に集約する各教科で育まれた資質能力

本校では、総合的な学習の時間を教科横断的な学びを集約する学習と位置づけ、各教科で育まれた資質能力を発揮することができるようにしている。これにより、子どもたちが自ら学び・考える姿が見られる。

(2) 人とのつながりを大切にした学習活動

① 開かれた学校づくりによる地域人材活用の充実

多様性豊かな校区の特長を生かして、学校教育の中にたくさんの地域人材を活用するようにしている。

② “Think Globally, Act Locally”

調べたこと・分かったことをSWOT分析することを通して、世界的な視野で考え、屋久島で、自分たちに何ができるのかを考え、行動することができるようにしている。

III まとめ

今年、世界自然遺産登録30周年を迎えた屋久島。子どもたちが、屋久島を「当たり前」に思うのではなく、「これからも私たちが守っていくべき」と思い、行動するためには、教育におけるESDの充実が重要である。

ESDの視点で捉えた子どもの姿 —アサガオと子どもたちの関わりから—

白石 真季（奈良教育大学附属幼稚園）

I はじめに

幼児教育におけるESDの実践は、何か特別なことをしなければならないと感じてしまいがちだが、私たち保育者が日々子どもたちの成長を願い行っている幼児教育の中にすでにESDの視点が内包されているのではないだろうか。

II 実践の概要

保育者が、身近な自然物に興味関心や親しみを持ってもらいたいと願い、クラス子どもたちと一緒にアサガオを種から育てた。“アサガオ”という環境に子どもたちがどのように関わっているかを記録し、子どもたちに育まれているESDの視点や資質能力を考察する。

【枯れた葉っぱをもどそう】9月22日

A児が自分のクラスで育てているアサガオのプランターを見ながら「先生、この葉っぱ枯れちゃってるよ。」と枯れている葉を指さした。「ほんまやなあ。」と共感すると、「水をあげればもとに戻るんじゃない？」とA児が自分なりに考えたことを言った。「どうなんだろうね。」と枯葉をとったA児の行動を見守った。必要なものがあるかを聞くと「コップと水！」と言って近くににあった透明コップを持ってきた。A児は近くにいた友達と一緒にコップに水を入れ、そこに枯れた葉を挿した。後日、変わらない枯葉の様子に「戻らないね。」と言った。



【子どもの姿からとらえるESDの視点】

多様性：緑の葉や枯れている葉があることに気付く。

相互性：自分のクラスのアサガオの世話をしたり、気にかけていたりしている。

有限性：枯れてしまう葉があることを知る。

【子どもの姿からとらえるESDの資質・能力】

批判的に考える力：アサガオの葉に自ら関わる中で自分なり気づいて考えを巡らせる。

未来像を予測して計画を立てる力：“枯れた葉を水に挿せばもとに戻る”と予測する。

つながりを尊重する態度：自分のクラスのアサガオに親しみを持つ。

進んで参加する態度：枯れた葉に対して思いを持ち、自分なりに思いついたことを進んでしてみようとする。

III 考察

保育者がESDの視点をもって、毎日の子どもたちの姿を捉え、保育を振り返ることで、子どもたちの中にすでにESDの視点や資質・能力が育まれていることがわかった。私たち保育者が、これまで大切にしてきた幼児教育を基盤に、子どもたちの“人・もの・こと”すなわち、園生活のすべての環境との関わりを丁寧にとらえ、子ども達の将来・未来を見据えて、ESDで育みたい視点や資質・能力に繋がるように意識しながら保育をすすめることが大切であると考えます。

持続可能な材料「竹」について考える

—竹灯籠の製作を通して—

田坂 一稀（滋賀県長浜市立北中学校）

I はじめに

本実践は、中学校第1学年の技術・家庭（技術分野）において、さまざまな材料について考える。その中で、昔から使用されている材料である竹に着目し、竹灯籠の製作を通して、自然材料の良さに気づくことができる。また、最終的に竹炭にすることで、使用後も簡単に違うものへと活用することで、竹が持続可能な材料であるということに気づかせる。

II 実践の概要

第1学年 技術・家庭（技術分野） 全10時間

- (1) それぞれの材料について考える。 授業時数：1時間
 - ・材料の使い方、材料の課題、材料の使用後、環境面への影響について理解する。
- (2) 竹についての資料を作成し、発表する。 授業時数：2時間
 - ・竹の使い方、竹の課題、竹製品、使用後の活用方法について理解し、発表することができる。
- (3) 竹灯籠の製作 授業時数：4時間
 - ・竹を加工する中で、自然（材料）の良さに気づく。
 - ・道具を正しく使用することができる。
- (4) 竹炭の製作 授業時数：2時間
 - ・竹炭の作成方法を理解し、竹の使用後の活用の容易さに気づく。
- (5) 持続可能な材料について考える。 授業時数：1時間
 - ・竹が持続可能な材料であることを理解する。

III 考察

竹について考え、竹灯籠の製作を通して、生徒アンケートより、竹などの自然な材料の良さに気づかせることができた。また、製作で出た端材などの破棄する竹を実際に竹炭に加工することで、竹が持続可能な材料であることに気づかせることができると考える。今後は、竹灯籠を卒業式などの行事で使用し、その後、竹炭にするなど学校生活の中で可視化することで、より深く持続可能な材料について考えることができる。また、流しそうめんなど竹灯籠以外の竹製品も考えていく必要がある。

ESDの視点における美術教育

—持続可能な社会づくりにおいて美術が果たす役割を考えることを通して—

眞柴 さなえ（愛媛県松山市立東中学校）

I はじめに

美術科の学習は、材料や自然との相互作用から感じ取ったことをもとに主題を生み出して形や色に置き換えたり、人や社会との関わりから問題を発見して課題を設定し、その解決方法をデザインしたりする題材を学びの糧としている。子どもたちが自分の頭で考え、造形的な見方・考え方を働かせながら、人間の強みを伸ばし、鍛えていくたくさんの要素を含んでいる。

そこで、美術科の学習にESDの視点を取り入れ、社会の様々な問題と未来について話し合い、考えていく中で、その問題の多様性や相互性に気づき、一人一人が未来を担う責任を意識した上で作品制作をさせたい。また、他者とのコミュニケーションを通して、批判的に考える力や多面的・総合的に考える力、未来を予測して計画を立てる力を生徒相互で高め合えるようにしたい。

II 授業実践の概要

◆第1学年 「命つなぐマイスプーン」

愛媛県が全国的にも「木」という資源がとても豊富であり、愛媛の木材ブランドである「媛すぎ・媛ひのき」を全国的に展開していることを生徒に紹介し、愛媛産のひのきを使って（愛媛の命を受け継いで）自分たちが生活で使うスプーンを制作する。木材を提供していただいた方から教科書にはのっていない木の魅力について話を聞き、制作時は木工の専門家である愛媛大学の先生に制作時のコツを伝授していただく。愛媛の木材の香りをかぎながら、愛媛の命と向き合い、また、伝統工芸にも触れていく。昔から伝わる工芸品をこれからの生活スタイルに合わせながらも受け継いでいく活動である。

◆ESDとの関連

【SDGsについて】 11.住み続けられるまちづくりを

12.つくる責任、つかう責任

15.緑の豊かさを守ろう

【ESDの視点】 責任性・・・愛媛の自然を受け継ぎ、生かしていく。

【資質・能力】 ・つながりを尊重する態度
・多面的、総合的に考える力

【価値観】 ・幸福感
・世代間の公正

III 考察

制作だけでなく、木材や、木工製品、愛媛の魅力にも触れ関心を広げること、愛媛の命をつないでいくことの大切さや生活に美術が役に立っていることに気付かせ、これからの自分たちの生活をよりよく生きていくためにできることを考えさせることができた。

旭志えがおプロジェクト —学校と地域の集いの場所づくり—

米田 祐貴 (熊本県菊池市立旭志中学校)

I えがおプロジェクトの概要

(1) 目的

中学校を中心として、地域に暮らす多様な年代の方同士の交流の場を設けることに加え、地域の魅力を発信し、多くの方のつながりのもと、たくさんのえがおを生み、守り続ける場をつくる。

(2) 構想

○校内の空き地(武道場跡地)を中心に環境の整備を行い、人が集まれる場をつくる。

・芝生広場の整備 ・マルシェの開催 ・ペット同伴の避難所

○地域が元気になる取組を企画し、実行する。

・ランチ会 ・学習発表会ステージ ・イルミネーション、竹明かり

II えがおプロジェクトとSDGsとの関連

(1) 課題

○旭志の抱える課題

過疎地域への認定を受け、暮らしやすさを向上させたり、地域の盛り上げを求めたりすること。

○中学校の抱える課題

中学校の活動が中学校のみにとどまってしまい、広がりが見られないことや、中学生だけでは解決できない問題と出会うこと。

(2) 取組の実際

○芝生広場の整備

多くの方の協力を得ながら芝生広場の整備を行ったこと。

○イベント企画

芝生広場を活用して「えがおプロジェクト」の目的達成に向けたイベントを企画・実行したこと。

○コンポスト

芝生広場整備の際に出てしまう芝生の刈カスを用いてたい肥化を目指していること。

III えがおプロジェクトの成果

芝生広場を活用し、学習発表会で地域の方や幼稚園児を招いて、イベントを実施し、地域のお店と連携を取り「旭志マルシェ」を開催した。

そして、地域の伝統行事である「湯船神楽」「円通寺太鼓」「ほたる夜想曲」を地域の方から教えていただき、披露したことで、子どもたちが地域の良さを再発見した。また、今回の取組を菊池市広報や地元の新聞社に取り上げていただき、旭志中学校の取組を外部に発信することができ、本校の学校教育目標である「ふるさとを誇りに思い、一人ひとりが輝き、夢の実現に挑戦し続ける生徒の育成」につながった。

2023年ユネスコクラブの取り組み

—子どもたちの主体的な活動を目指した実践を通して—

山平 楓・苗代 昇妥（奈良教育大学ユネスコクラブ）

I はじめに

奈良教育大学ユネスコクラブはESDを実践できる教員になること、ESDを楽しく追究することを目的として活動している大学公認サークルである。

活動は大きく三つに分類できる。一つ目は、セミナーや講座に参加してESDを勉強することである。また、学生主催で勉強会も行っている。二つ目は、他のユネスコクラブと連携し、ともに活動を高め合う活動である。そして、三つ目はESDを実践したり支援したりする活動である。

II 「裏山探検と森を感じるクラフト体験」の実践

3月21日（火）奈良教育大学附属中学校において、附属中学校裏山クラブとの合同企画「裏山探検と森を感じるクラフト体験」を行った。対象は幼稚園児とその兄弟である。ユネスコクラブは裏山探検で採った落ち葉や木の枝等を使って①葉っぱのこすり出し、②葉っぱ釣り、③見立て遊び、④葉っぱラミネート、⑤バードコールのブースを運営した。自然に親しむこと、この体験を通して今後も自然と触れ合いたいという思いを育むことを目的とした。子どもたちの発想力は非常に豊かであり、③見立て遊びでは葉を恐竜に見立てて作品を作る子どももいた。子どもと保護者を合わせて約40人に参加していただいた。他にも裏山クラブによる焼き芋体験やクラフト体験ブースなど多くの活動があり、子どもたちは興味を持ったブースで自然を感じながら活動に没頭していた。

III 「大学生とワークショップSDGs」の実践

8月5日（土）に奈良市立富雄公民館において、小学生を対象に「大学生とワークショップSDGs」が行われた。保健や水・衛生、インフラに関する問題を捉え、自分ができる解決方法について主体的に考え、行動できるようになることを大きな目標として設定した。

活動内容は大きく4つに分けた。1部では、人体には水が必要不可欠であることの説明、2部では綺麗な水を使えることが当たり前でないことの説明と浄水施設の仕組みを体験する活動、3部では、震災の影響で浄水場が使えなくなった経験のある部員の体験談と濾過器づくり体験、4部では、学習のおさらいとしてクイズを行った。最後には、今回の学びを今後活かしてもらうために「お水博士」の認定式を行った。始まる前から子どもたちに積極的に声かけをしたり、体を使って体験的に学べる工夫をしたりしたことで、子どもたちの学習意欲を高めることができ、意見や発言をもとに活動を進めることができた。

IV おわりに

今年は昨年よりもさらにコロナ禍前の活動や新たな対面の活動ができるようになった。今年の経験を来年度の活動の推進につなげていきたい。

2023年度 近畿ESDコンソーシアム
成果発表会・実践交流会

2024年1月6日発行

近畿ESDコンソーシアム
奈良教育大学 ESD・SDGs センター
〒630-8528 奈良市高畑町

